おおとり会だより

平成４年４月22日発行
静岡女子短期大学
静岡女子大学
同窓会　おおとり会

悼　さようなら　美尾浩子さん

高嶋　健一

（ありし日の美尾浩子さん　1991年5月）

女子短大へ赴任したのが、私は昭和三十二年七月、美尾さんは翌三十三年四月だった。卒業生でもある美尾さんは、教育大卒として英文科の助手となって帰って来られたわけである。若い助手さんたちがいろいろと噂していたのを、三十五年後の今日もありありと覚えている。今度来られる美尾さんは、銀座の何々という美容室で髪を手入れし、眼にはコンタクト・レンズというものをつけている……ということであった。当時まだ珍らしかったコンタクトを入れていた――東京の最先端を身につけた美尾さんの帰任であった。

当時女子短大には若い先生が少なく、年齢的にも近い美尾さんとは気が合ったというか、親しくなって行った。何よりも頭のいい人、仕事の出来る人、そして暖かい心の持主――ということが魅力であった。骨惜しみをしない、誠実な人柄も多くの先生方から信頼を得ていた。私は公の面ばかりでなく、私の面でも親しくして頂いた。美尾さんのお嬢さんをお預りした時期があったし、私の娘も何かあれば美尾さんのおばちゃんに相談していた。美尾さんのことばは父の私のことばより重いようであった。

――――――

女子短大が女子大となり、女子大が県立大となる過程において、美尾さんは助手・講師・助教授・教授と確実に大学内での地歩を固めて行った。いや、大学内ばかりでなく外部の県や市の仕事でも、すばらしい活動を見せていた。いやと言えない美尾さんの性格が仕事量をふやし、頑張りやの彼女はそれを充分処理していた。ときどき疲れた顔をしているのを見るようになったのは、何時ごろからだったろうか。一度だけだが、〈あなたも五十歳を越えたのだから、少しは身体をいたわらなくては……〉と言ったことがある。〈わかってる、わかってる〉と答えた美尾さんは、その後も忙しさから解放されることがなかった。病魔が襲ったのはいつのことだろう。

平成三年四月から美尾さんは県立大の国際関係学部の学部長に就任した。県立大初の女性の学部長である。一層多忙となり、しかし生き生きと学部長業務を片づけていた。五月の健康診断の翌日、たまたま事務局で出会ったとき、「先生、あたし右側の肺に影があると言われたの。精密を受けなくては……」と言った。驚いた私は、「それは大変だ！大丈夫？」と聞いたのだが、美尾さんは、「結核か癌か、はっきりしないが上部の小さなかげだから、たいしたことないと思うよ。」とわりに楽観的であった。それが半年後の死につながるとは、予想もできないことであった。

十一月十五日の死、その前日まで大学業務で人に会っていた。ベッドの上で、刻々に悪くなって行く身体をふるい立たせての営為であったに違いない。亡くなった日も私に会いたい（おそらく公的なことでの相談だと思う）という言伝てを聞いていた。いま思い出しても涙が噴き出てくる。

「悲しともまた悔しとも鮮烈に五十五歳を突走りたり」

葬儀の日、口をついて出た一首である。

美尾浩子さんとの惜別の日

日本エフエルエス株式会社
取締役　佐々木　清　子
（短大英文科五回卒業）

昨年の六月、体調が悪いとの報を受けては居りましたが、日頃お元気の様子が印象深く、まさか、病気などとは、予想もせず、心配もせず、もしそうであっても必ずや彼女の事とて、回復に向かう努力をするものと信じ、ただひたすら良い知らせの来るのを、待ち望んで居りましたが……。

八月末日、本人から一通の手紙が私の元へ届きました。それによると五月の職員健診で、異常が発見され、六月二十六日急遽肺臓の一部切除の手術を受け、一命はとりとめたものの長期に亘っての闘病生活を、よぎなくさせられる事、末尾に体力の消耗がはげしく、苦しかったのでしょうか「長い夏でした」と、記されてありました。

（平成３年６月。静岡県立大学国際関係学部長就任を祝っての同窓会場にて）

私はその手紙の筆跡をみて茫然と立ちすくんでしまい、これは大変な事だと思い、とに角、お逢いしたい旨の連絡を致しました。丁度、十月十日折しも原智子さんの結婚式に出席の帰途、同窓の荒木さんと共に、参上致しました処、私の来静を心待ちにして居ったとの事、いつもの美尾さんと変らない態度で、私達を歓待して下さいました。とても肺癌の手術を受けた様子もなく、私は心の中で、〝ホット〟安堵し暖かいものを感じる次第でありました。しかし本人の説明によれば、肺の手術は完璧に治癒し成功したが「他にあるもので」、その治療があと六回残っていること。しかし三日程前より体調が悪化しあと六回の治療を止むなく断念せざるを得ないこと。左手を開げ右手の人差し指を、その広げた手の平に乗せて六の字を造り、治療が出来なくなったことが、無念で口惜しいと、今にも泣き嗚りそうで、私はとても彼女の顔をみつめているのが辛く、慰める言葉を選び、「来春になればきっと回復するから、それ迄頑張ってよね」とただひたすらその言葉のリピートでありました。

静岡県立大への移行に伴う国際関係学部の設置は、二一世紀の国際化社会の要請に応え得る、国際的な広い視野と、確かな語学力を持つ国際人を育成することを目的として、それらが真の世界平和への貢献に役立つ事を念願していると述べ、私も国際人の一人として、彼女の趣旨に同感であり、もちろん、国際関係を良好に保つためには、何んと言っても語学力と物事に対する誠意であることを、毎日身をもって体験している、と語り合いました。彼女は己れに課せられた社会的使命を果すべく、全力を上げて、その新しい学部の設置に当たり、三年程前から、左肩及び左手が上らず、ことの外、疲労してしまったと苦闘の日々の辛さを、淡淡と語ってくれました。

病床に、余り長居も禁物かと思い再度伺う約束をし、「とに角頑張ってね」と激励の言葉を残しお別れしました。私は心の何処かで、彼女からの「頑張るさ」という答えを期待して居りましたのに、彼女は私の願望も虚しく、無言のまま、淋しそうに、微笑んで居りました。それが今生の別れになろうとは、ビルの最上階で東京の空を眺めながら、育児論を語った日々のことを思うと、とても信じがたい出来事であります。

ここに慎しんで故人の御冥福を御祈り申し上げます。三十余年の長きに亘る御厚情、御指導、数々の思い出をありがとうございました。自ら保証人になって、卒業生、関野由里子、黒崎馨、小柳恵子、原智子、諸女史の当企業への進出を試みた故人の功績に深く感謝する時、万感胸に迫る想いで頭が下ります。

故人の御霊（みたま）の安らかに、昇天されんことを願い、残されたご家族に永遠のご加護がありますことを祈念致します。

■美尾浩子さん略歴

五十五歳。富士市出身。昭和四十二年から県立静岡女子大講師となり、助教授、教授を経て六十二年から県立大の教授・評議員。平成三年四月から国際関係学部の二代目学部長に就任した。県立大では初めての女性学部長、県婦人研究者の会代表を務めたほか、県女流美術協会会長、大学婦人協会県支部長などとして活躍した。

各科だより

英文科

アメリカから最近の日本を見ると

長田敏子
（短大英文科第二回卒業）

アメリカの小さな町の図書館に勤めて四半世紀になる。日本人は殆ど居ないので日本語は話す事も読むこともほとんどない。

数年前までは週刊朝日を送ってもらっていたのが、それもいつの間にか止まって、近頃は日本語のものといえば手紙のやりとりくらいになった。日本には二、三年に一度ずつ帰っている。私が帰ると、友人はつい先頃そこの町角で会ったばかりのように扱ってくれる。日本語を話すのは当然というわけだろう。だからといって私の日本語が全く退化しなかったというわけではない。

第一に漢字。手紙を書いていて、字を思い出せない。

第二に、これは退化というよりも化石化というべきか、昔日本で使われていて現在ではほとんどきかれないという言葉や表現を今でも口にすること。たとえば、街での距離を示すのに「どこの角から二丁いって…」という風に。つまり角から角までを一丁といういい方だ。これを使わないとすると何というのかときけば、何百メートルというのだそうな。

第三に、新語、流行語を知らないこと。日本に住んでいなければ不自由もしないのだが、翻訳の仕事をしているので新語、流行語を知らないと一寸困る。

流行語といえば、日本に帰ってきて毎回おどろくことは、片仮名英語の氾濫である。はじめはネオンにしろ看板にしろ、アルファベットの方が漢字や平仮名よりもデザインしやすいというのが理由だときいた。ところがここ数年来、新聞・雑誌、テレビの解説にいたるまで、いたるところに英語がとび出す。コンピューターとかビデオとか適当な日本語がないものはそれでよい。でもれっきとした日本語があるのに英語を使うのはどういうわけだろう。帰国するたびに英語がふえていく。〝トレンド〟〝メリット〟というのが今の流行語らしい。

日本語は貧しくなったのか。混乱しているのか。この片仮名英語の氾濫が逆に日本人の英語進歩をさまたげているのではないか、私の考えでは片仮名英語は日本語であって英語ではない。日本人のみに通ずる〝英語〟なのだから。その片仮名英語を英会話にもち込んだら、教師を困惑させるだけで実績は上らない。英会話の教師はまず片仮名英語を生徒の頭の中から追放することから始めなければならない。

外国語を学ぶのはよいことだと思う。外国の文化を知るにはまずその言葉を知らなければならない。だが自分が生れ育った言葉をないがしろにして外国語に走るのはどうだろう。日本語は味の深い美しい言語である。国語をしっかりわきまえた上でこそ、外国語が真に身についたものになるのではないか。言語の無国籍者にはなりたくないものだ。

国文科

学生時代、それは私たちの精神の原点

原田溶子
（短大国文科十二回卒業）

会員の皆様には、ご健勝にて各方面においてご活躍のこととお喜び申し上げます。

私共国文科は、二年毎の国文科同窓会及び、会報『国文科だより』発行と、ほんの僅かですが歩みを進めてまいりました。今年は国文科同窓会総会開催の年に当り、役員一同会員の皆様にお目にかかれる事を楽しみに準備をすすめております。

青年達は思慮深い実行的な愛に支えられた奉仕の精神の故に、生活共同体への目立たないが高く緊張した意識を所有していて、生活の日常的有益な技術を探し求めながら群衆の間に見えかくれして生きている。

大学時代こんな一文を話された先生がおられました。出典その他については定かではありませんが、多感な青春時代を右往左往しながら送ったことを上の文と共に鮮やかに思い浮かべます。あの大学時代は、今の私たちの原点だったのでしょうか。静岡女子大学の白亜の建物はなくなりましたが、あの時代は私たちの心に永遠に生き続けることと思います。

国文科幹事長の長屋梅子様は国文科総会開催にあたり、挨拶文の中で、私たちの心に永遠に生き続けるもの、これを、ふるさと感と称せられておられます。

会員の皆様、八月の国文科同窓会総会には、是非〝ふるさと感〟にひたりにお集まり下さい。

各科だより

被服科

生活科学センターの活動へどうぞ

長田直子（大学被服科四回卒業）

私は、学生生活四年間を含めて二十一年間を谷田の丘で過ごしました。当時、女子大学の白亜の建物が壊されるのを目のあたりに見るのは、大変つらく悲しいものでした。女子大は消えてしまいましたが、同窓生の思い出の中には、何時迄もその姿が残っている事と思います。

特に被服科は、県立大学の中には移行する学科がなく、生活科学センターとして新しく出発することとなりました。初代センター長の桑原昂教授は、センターの基礎を創られ、次にセンター長になられた立田洋司教授は、社会人に大学の門戸を開放するために「生活文化ぜみなある」「生活基礎科学ゼミナール」の二つの講座を開講しました。この講座の内容としては、ISL（institute of science of living）ニュースを発行し、各方面へ広く紹介して受講生を募ってきました。生活文化ぜみなある講座では、創意陶芸に人気があり、定員オーバーすることがしばしばでした。また日本伝統文化研修では、立田教授が同行講師として、より専門的な立場で説明されて、毎回好評でした。更に「生活基礎科学ゼミナール」講座では、板井隆彦講師が淡水魚の生活、高野加代子講師が時系列解析セミナーを、他にも学内の先生方（沼田、鷲山、勝矢教授）がご協力くださり、内容の濃い講座を開いてきました。そのISLニュースもこの四月で第六回目を発行しました。

今回は今までと違い各ゼミナールを統合し、新しく「社会人大学講座」を開講しました。これは、講座の時間割を定期化し、より一層大学らしい講座に近づけようとしたものであり、また静岡県立大学が県民の皆様に、より開かれた大学を目指そうとするものでもあります。この講座には、①セミナー・環境にどう関われるか ②時系列セミナー ③芸術学演習 ④世界文化史演習があります。また他には、今盛んに問題にされている「生涯学習研究講座」も開催されております。

静岡女子大学（被服学科）はなくなってしまいましたが、その精神は静岡県立大生活科学センターの中に息づいています。同窓生の皆様とのかけ橋、よりどころとしてできるかぎりがんばり努力して行きたいと思っています。関心のある方はご一報下さい。

食物科

「剣祭」へ バザーで参加

鈴木真理子（大学食物科二回卒業）

食物科から「剣祭」へのお誘い「人寄せには何といっても食べ物が一番」という牛木会長の言葉にのせられて、県立大学・大学祭「剣祭」にバザーで参加して二年目。昨年は天候にも恵まれ、出品したパンやクッキー、無農薬みかんなど、あっという間に売り切れ、おおとり会のバザーは学生達にも好評を博しています。

同窓会活動というもの、ただ総会や講演、その後の懇親会にとどまらず、こんな形での参加も楽しいと思います。当日の販売だけでなく、クッキーやパンを焼きに集まったり、「何をやってるのかな」と散歩のついでにのぞいてみてはいかがでしょう。新しい大学の雰囲気に触れるよい機会です。次回にはもっと事前の呼びかけを充分にして、多くの仲間に参加していただきたいと思います。ちょっぴり余裕ができて、お菓子作りでもまた始めようかなんて思っていらっしゃる方達、食物科の面目躍如のチャンスですよ。

総会だより

平成三年六月二日(日) 恒例の総会が県立大小講堂に於て開かれた。講師は、司会、ナレーター、詩人として御活躍のかとうみち子先生。難病と向かい合いながらも「病は私のいのち、友達、エネルギー」と明るく精一杯生きておられる先生、感動の一時間余りであった。

今年は六月七日(日) 県立大講堂で、講師に林洋子先生をお招きして、宮沢賢治の世界を企画、感動のひとときを味わっていただきたい。

（別紙案内あり）

※名簿発行・注文受付開始

短大・女子大全卒業生が載っています。

一部二千五百円（送料五百円）

振込先　名古屋 9－24671

静岡県立女子大学女子短期大学同窓会おおとり会　宛

※テレフォンカードの残少々あり。

※同窓会室入口に〝おおとり会〟の看板が取り付けられました。

―お知らせ―

訃報

県立大名誉教授の金原光雄先生は病気療養中のところ平成四年二月四日ご逝去なされました。ご冥福をお祈り申し上げます。

発行　〒422 静岡市谷田395　県大内　おおとり会同窓会事務局